

VRT 職業レディネス・テスト

VOCATIONAL READINESS TEST

教員研修の事例

早稲田大学大学院教職研究科

教授

三村隆男

職業レディネス・テストと聞くと、高校の先生によっては、「うちは進学校だから、就職の準備は必要ない」と早合点する先生がいる。そのためVRTの機能を端的に示した「役割興味検査」と表現すると受け入れられやすい。また、検査結果は、立体がある方向から切った断面図のようなもので、立体そのものを正確に表現することはできないが、立体的な部分の特徴は示している、との説明が受け入れられやすい。キャリア教育でVRTを活用する場合、興味の位置づけを明確にすべきである。図は、スーパターの職業適合性を示すが、この図を通して、興味はパーソナリティに属することを理解してもらう。2011年、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・

導入と工夫

キャリア教育を進めるうえで職業レディネス・テスト(VRT)の有効性は高いが、優れたツールになるかどうかは、その活用にかかっている。ここでは、VRTを活用する教員向けの研修会の在り方について触れる。優れた教育プログラムや教材は多いが、それを使いこなすための研修プログラムの開発は遅れているからである。

はじめに

表 研修会用シート

表 研修会用シート

T. Mimura

◆以下の各時期に夢中になって取り組んだこと、やっていた楽しかったことなど本欄内に書いてください。例えば、「夢中でプラモデルを作った」「お手伝いで必ず買い物に行った」「何でも分解して楽しんだ」「時間の経つのも忘れ...をしていく」などで結構です。

	取り組んだこと、やっていた楽しかったこと	A検査の結果
【小学以還】		
【中学校時代】		
【高校時代】		
【大学時代】		
【卒業後から現在】		

シニアメンタールの自己理解について

所属校 _____ 名前 _____

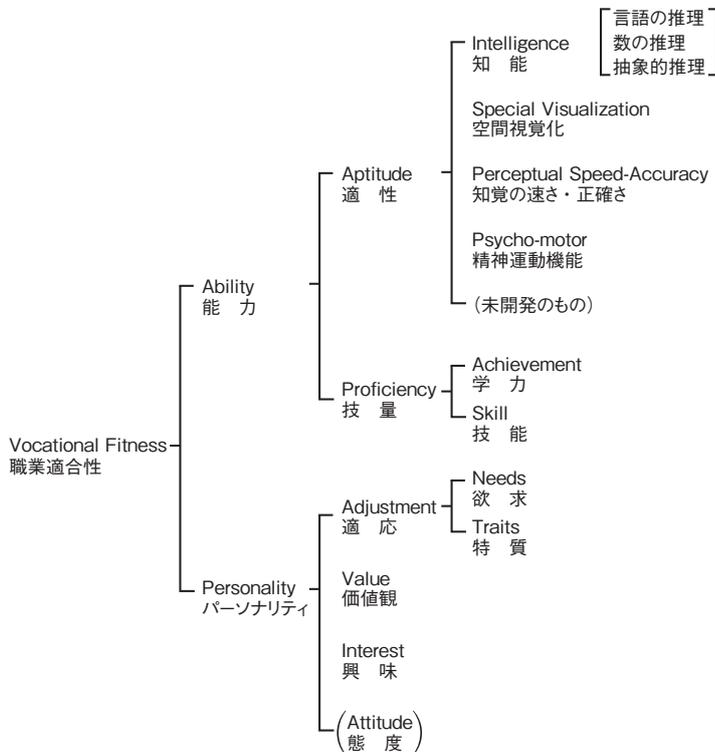


図 職業適合性 (Super, D. E. (1969))
進路指導研究セミナー報告書 (日本職業指導協会)

職業教育の在り方について」では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義した。この中の「能力や態度」は、図中の「能力とパーソナリティ」に相当する。つまり、興味を知ることはキャリア教育における態度を育成することにつながる。

展開事例

■目的

研修会の目的は、次の二つである。

① 職業レディネス・テストの意義を教師が実感すること。

② ①に基づき手順を理解し、より効果的な活用を自ら創意工夫すること。

これらを実現するために研修会用シート(表)を使用する。シートは、教師がこれまでの自分の足跡を振り返り、自らが熱心に携わった行動を通し、その背景となった興味について考察できるように作成されている。

■手順

1 VRT実施に先立ち、太線の部分を記入してもらう。各時期に夢中になって取り組んだこと、時間を忘れて集中したことなどを思いつくだけ記入してもらう。行動レベルなので、

「訳もなく没頭したこと」を「何でも思いつく限り」と指示するとさまざまな記憶がよみがえるようであり、記入の数が増える。

2 「結果の見方・生かし方」のワークを順序通り実施する。シートの右上にあるA検査の上位3位までが情報として必要なので、研修会の時間が限定されている場合はA検査のみでも所期の目的は達成することができ

る。
3 A検査の結果をシート右上に記入し、それぞれの上位三つのパーソナリティタイプ(興味)が過去の行動の背景として認められるかどうかの考察を、右側の空欄に端的に書いてもらう。この気づきが目的の①を達成するために重要である。

「泳ぐのが好きだった」との記述に対しては、「泳ぐというのは孤独な作業ですよ、孤独がよかったのでしょうか」「泳ぐことは水という道具を使って推進すると捉えることもできますよね」「泳ぎは決まった行動を繰り返すことによつて進んでいきますよね」といった、行動とその背景にある興味とを類推する(意味づけ)る)気づきを起こす言葉かけをしていく。

このような作業を進めていくと、さまざまな気づきを起こし、無意識の行動が興味という動機づけや意

味づけと関連していることを実感する。

実感しはじめると「この検査はよく当たりますね」との声が聞こえてくる。ここで「科学です」と理論と実践との融合がいかにかキャリア教育の実践では重要かを認識してもらう。

4 空欄の記述が終了したらグループで次の手順でシェアリングをする。

○ シートを回覧し相互で閲覧。この場合、無言で記述を読み取るようにする。

○ 一人1分でシートの記述を順に発表する。特に、VRTの結果と関連する内容については簡潔な説明を行う。

○ その後ディスカッションに入り、それぞれの発表を聞いた際の、意見や感想を述べ合う。

ディスカッションを通し、VRTで示されるパーソナリティタイプへの理解が深まる。

過去の経験は固有のものなので、ここでの議論は大変盛り上がる。各自の発表は生徒を指導する場合のケーススタディにあたり、ここでは指導の工夫が創出され、②の目的が達成される。

5 各グループで学んだこと及び疑問として残ったことについて発表し、全体のシェアリングとする。

最後に、自己理解の欄を記入して終了とする。

この研修で重要なことは、VRTが興味検査であることを確認することである。興味検査と適性検査を混乱して使っている場合も多く、図の職業適合性では、興味はパーソナリティに類型化され、適性は能力に類型化される。根本的に異なるのである。興味はそのときの行動背景となるが、可変性も併せもっている。この特徴には生徒からの相談についても柔軟に対応できるというメリットがある。

おわりに

VRTはキャリア教育を推進するうえで非常に有用な教材であるが、指導する教師の理解に大きく左右される。現在、公立中学校の職場体験実施率は98・4%、公立高等学校のインターンシップ実施率は79・3%で、体験活動による職業理解が進められている。

VRTはその名の通り職業理解にとつても優れているが、今回の教員研修での使用は、その本質である役割興味を明らかにすることで、職業理解の基盤を形成することを意図している。こうしたVRTの活用は、役割取得が主な小学校のキャリア教育との連携の可能性をも示唆している。